



中高生とともに差別と闘う

人形のムラ

吉成タダシ (うずしおランチ代表)



無駄じゃない

前号の続きで、「阿波木偶箱まわし」研修に行った教職員の感想です。

「私が小学生の頃、地区出身の友人たちは(同和対象地区)学習会に参加していました。しかし、私が学習会の目的に気づいたのは、小学六年の頃だったと思います。それまでは学習会に参加している友人に対して、「タダで先生に教えてもらえる勉強会があるなんて、いいな〜」や、「あの子らだけ、昨日の学習会のことを先生と話してて、なんかうらやましいな〜」などと思っていました。神社のお祭りのときには、地区出身の友人は、おみこしに乗らないといけないから…などと学校を休んでいて、「なんであの子らだけ? ずるいな〜」とも思っていました。

小二の頃、友人から来た年賀状の〇〇〇という住所を見て、「あら、この子〇〇〇の子なん?」と、なんだか意味深な言い方をされたこともありました。

お祭りには毎年行っていたし、会館にも何度も見学に行っていました。が、恥ずかしながら私はまったく分かっていませんでした。

小六で部落差別などについて本格的に学習するようになって、そこで初めてモヤモヤが全てつながり、正しい知識がなければ差別に気づくこともできないのかと、ハツとしました。

まだまだ祖父母くらいの年代には差別意識が残っています。しかし、「あなたたちがやっている人権学習

は無駄じゃないよ」と言われた言葉

を信じて、差別と闘い続けてきた人々の生き様や思いを、生徒とともに学んでいきたいです。(四〇代教員)

正直に書いてくれたなー、と一人で苦笑してしまいました。正直すぎるほど正直な前向きな思いが滲んでいて、肯定的に受けとめることができました。

フィールドワークも終盤になって、講師の方がおっしゃいました。木偶まわしの女性二人を指して、「先生方のしてきたこと、していることは無駄じゃないんですよ。こうやって、次代を担う若者を育ててくれたわけですから」と。

「過去は変えられないが、未来は変えられる」
そんな言葉が私のなかに降りてきました。

こうやって交流し、関係性を築き、自分の思いを吐露できたなら、今も残る様々な問題が解決に結びつけられるのではないかと思います。

「出会い、つながり、学び合い」
同和教育が大切にしてきた大きな柱です。それはいくら時代が変わっても変わらないのだと思います。

「思い」を具現化すること
「私が部落差別を知ったのは、小学生の頃でした。人権学習で、講師の方から講演をしていただきました。最終、涙を流しながら「自身の体験や経験を話している姿を見て、小学生でしたが皆が涙を流しながらお話を聞いていたことを今でも覚えて

ています。その時の講師の方の、「今でも続いていることを忘れないうで」という言葉がずっと心の中に残っていました。

私は小学校を卒業して十四年になります。今回の講演の中で、「今でもなお部落差別は解消されていない」という言葉を聞いて、何と表しているのか分からない、心苦しい気持ちになりました。それと同時に、知るだけでは何も変えていけないんだと改めて実感しました。生徒たちに伝える立場となり、私には何ができるのかを考え行動していかなければならないと感じています。

いただいた資料に目を通しました。その資料にも、「三十三年間の同和行政の成果と欠陥」という中に、「部落差別が今なお未解決である」という文章があり、部落差別の歴史は長く、本当に根深いことが伝わってきました。これから生きる私たちが打破していかなければならないと強く感じました。(二〇代教員)

どうやって打破していくのか。
人権教育としてスタートした当初、「同和教育で培った手法を人権教育に生かし」と、よく言われました。果たしてそれは十分行われているのか。そうでもないように感じます。

むしろ、「同和教育」は終了したから、それはそれとして、新しい「人権教育」をスタートさせよう。そうしようとしてるのかのように感じることがあります。それを打破するのは誰か。「国民的課題」と言われたように、すべての国民ではあるの

ですが、とりわけ、同和教育運動の時代を生きてきた者には、その責務があるのではないかと思います。あの時代を生きてきた者が後世に伝えていかなければ、その手法も精神も失われてしまうのだと思います。

「人形のムラ」

会長さんとまわし手二人の三人が中心となって、廃所となった地元の保育所を市から買い取り、リニューアルさせ、二〇二二年三月三日に、「人形のムラ」としてグランドオープンさせました。全国各地の仲間呼びかけ、寄付を募り、自力で再建させたのですが、とにかく人形の頭の数多さとパリエーションの豊富さには圧倒されます。それだけでも価値がある。しかし、同じ市内で教員として勤めているながら、そのことを知らない。新聞やニュースで知っていても、行ったことも見たこともない。それで、どうやって部落問題学習をするのか。本当はちよつとかが、ただだけでは分からないのです。が、それでも、「せめて行っておこうよ」と思い企画しました。そうすれば、「また行こう」と言い出す人も出てくるかもしれない。個人的に関心をもつ人も出てくるかもしれない。そうやって次世代に託すつもりでの企画でした。できるならば、「市の教員研修として、全員が必ず行く」くらいになれば、と思ったりします。

よければみなさんも一度、訪れてみてください。ありがたい福を授けていただけますよ。